

入間市団塊意識調査の分析から考察する入間団塊世代のポイント

- I. 団塊世代の働く目的
- II. 団塊世代のマトリックス
- III. これからの課題を予測する
- IV. 定年後の欲求レベル

I. 団塊の世代の働く目的

～団塊世代は「何歳まで働くのか」「働く真の目的は何か」～

団塊の世代が定年後働く目的は大きく次の2つに分けることができます。

- ① 生活のための収入を確保すること。
- ② 社会とのつながりや生きがいをもとめること。

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構の調べによると、団塊の世代の66.6%が定年後も働く意思を持っている。ただこの内28.6%が「働きたくないが、働かざるを得ない」と

今回の調査では、定年後も88.6%の人が働くことを希望しています（問15就労希望年齢の男性データ）。この約90%の人は何のために働くのでしょうか。「①の生活費のため」、または「②の生きがいのため」、もしくは「①と②の両方のため」かもしれません。この2つの仕事に対する目的は団塊の世代のこれからの動向を考えたとき、すべての課題を考える基本条件として考慮する必要があります。単発の質問の反応だけを見ると、表面的な意向（建前）とほんとうの気持ち（本音）の違いを判断ミスする可能性があります。これからは常にこのことを念頭に置いて考えるべきでしょう。

今回の調査では29の質問を行っていますが、仕事や収入に対する課題は次の6つの質問から推察することができます。

- 問11. 生活の変化での関心事
- 問12. 生活設計手段
- 問14. これからの生活重視項目
- 問15. 就労希望年齢
- 問16. 希望職業内容
- 問17. 希望収入形態

■「問11. 生活の変化での関心事」の質問から、定年後の関心事が「余暇の使い方」や「健康問題」なのか、または「収入に関すること」のどれを選択したかで推察することが出来ます。今回の調査では、男性は47.2%の人が今後の関心事に「収入や経済」を選んでおり、2位の「健康維持管理」の18.6%を大きく離しています

【ポイント01】 約50%の人は定年後の収入のことを関心事としてあげており、定年後の生活が悠々自適で安泰とは言えないようです。

■「問12. 生活設計手段」では今後の収入源について質問しています。男性1位の回答は「年金収入」の48.2%でした。この回答から約50%の人は年金による収入を見込んでいることがわかります。それ以外では「預貯金財産収入」と回答した人が2.3%ですから、年金以外はほとんどが、勤めるか事業をすることで収入を得なければいけないようです。

【ポイント02】 定年後の収入は年金で生活する人と仕事で生活する人が半々である。

■「問15. 就労希望年齢」の質問では、約90%の人が定年後も働くことを希望しており、問12の年金収入が約50%であることと食い違いが出てきています。その中でも、「生活設計手段」の質問で「年金収入」と回答した人の148名が何歳まで働くことを希望しているのかをクロス分析（P103）で見ると、

「60歳から65歳未満」64.2%、

「65歳から70歳未満」14.9%、

「70歳以上」1.4%

の合計80.5%が定年後も働くことを考えています。

【ポイント03】 定年後の主たる収入源は年金であるが、それでも60歳の時点では80%が仕事をする予定である。

■「生活設計手段」を年金収入と回答した人の148人のうちの80.5%の119人は年金収入と答えているにもかかわらず、今後も働く予定です。ではなぜ働くのかを推察すると次の5つのパターンに分類されます。

① 年金収入はあるが、

A「受給年齢までの間働く」

- B 「年金受給金額が少なくそれだけでは生活できないから働く」
- C 「将来に対して不安を感じるので働く」
- D 「社会とのつながりや自己実現のために働く」
- E 「他に特にやることがないから働く」

AとBは生活費獲得のために働く必要のあるタイプです。C・D・Eは金銭のためより他の要素をもとめて働くタイプです。しかしAタイプは必要な期間は63歳まででその後は働く必要はなくなると考えられます。

【ポイント 04】 「生活設計手段」を年金収入と回答した人も80.5%が働くことを考えているが、64.2%はAタイプであり、残りの16.3%がB～Eタイプであると考えられる。

A～Eタイプをもう少し詳しく説明します。

A 「受給年齢までの間働く」

年金受給年齢が段階的に引き上げられており、部分的ではあるが63歳から支給が始まるのが一般的と考えられます。そうすると少なくとも3年間は年金による収入が当てに出来なくなり、退職金や蓄えの少ない場合は働かざるを得ません。

B 「年金受給金額が少なくそれだけでは生活できないから働く」

63歳や65歳になっても、過去の年金加入期間や種類、標準報酬額によって受給金額が変わってきます。厚生労働省統計データによると「世帯別の受給額は167万円～261万円」となっており、金額にかなりの違いが出ています。今後住居費などかかる賃貸に住んでいる場合や家族構成によっては、受給金額の少ない人は生活費の不足が考えられます。その場合は働くことによって補わなければなりません。

C 「将来に対して不安を感じるので働く」

年金による収入や蓄えがある程度あっても、漠然とした不安を感じ、なんとなく仕事を続けるケースです。肉体的にも精神的にもまだ十分に働くことが可能なため、特に必要にせまられていなくても、1日何もしないことを嫌がったり、もう少し経済的な余裕を求めて仕事を続けるタイプです。

D 「社会とのつながりや自己実現のために働く」

このタイプは生活のためではなく、仕事を通じて自分の価値を見いだすタイプです。基

本的には仕事が好きで、あまり苦にならない人かもしれません。また専門的知識や技術、経験を持っていることが考えられます。

E 「他に特にやることがないから働く」

会社人間で40年近く過ごしてきて、会社との関係が無くなるとそれ以外の付き合いがほとんどなく、また特にやりたいこともないため、ぶらぶらしていても仕方がないので仕事をするケースです。仕事をしなくても特に生活に困りません。積極的に仕事をしたいわけではないのですが、それほど仕事に不満も無いタイプです。

分析を続けます。

■ 「問17. 希望収入形態」では、男性60.6%の人が「常勤の安定した収入」を希望しています。

また「問16. 希望職業内容」では、

「趣味を生かした仕事」「社会貢献の高い仕事」より

「現在の仕事」54.4%、「どんな仕事でもよい」15.6%

と合わせて70.0%が現実的な仕事を希望しています。

この回答から問17では60%、問16からは70%の人が、AとBの生活費獲得タイプであることが推察できます。

【ポイント05】 仕事を希望する中でAとBのタイプは約60%いる。

■ 「問14. これからの生活重視項目」では「仕事・事業」と回答した人は3位の24.4%でした。

1位「趣味ライフワーク」42.0%、

2位「家庭生活」25.7%

3位「仕事・事業」24.4%

80%が定年後も仕事を希望し、60%が「常勤の安定した仕事」を望んでいるにもかかわらず、これからの生活重視項目では、「趣味ライフワーク」と「家庭生活」が67.7%を占めています。つまり、仕事は続けるけれど、定年後は仕事優先ではなく、「趣味」や「家庭」を大切にしながら仕事も続けたいという結果になっています。

【ポイント05】 「仕事人間」や「会社人間」であった人が、これからは「趣味」や「家

庭」大切にしながら、しばらくは仕事を続けていくライフスタイルを望んでいます。

仕事を続けていく属性の中で「生活のため派」と「生きがい派」に分かれています。ではその比率がどのくらいなのかをマトリックスで分類していきたいと思います。

II. 団塊世代のマトリックス

定年後のマトリックス

高↑生きがいで働く意欲↓低	A	B
	D	C
	低←生活のために働く必要性→高	

- 【Aタイプ】 生きがい重視の余暇型ー第2の人生エンジョイ派
- 【Bタイプ】 収入面と生きがい面の両面ともやる気の現役型ーまだまだ頑張る派
- 【Cタイプ】 生活のための切実型ー生計重視の現実派
- 【Dタイプ】 あまり困っていないが仕事への興味もないのんびり型ーマイペースのんびり派

たて軸↑は「生きがい優先型」「自己実現型」

よこ軸→は「生計優先型」「収入確保型」

たて軸の中間は、「ちょっと社会貢献してみようか派」

よこ軸の中間は、「ちょっとお小遣い稼ごう派」

今回の調査結果を複数のクロス分析をすると以下のように分類されました。

男性

Aタイプ 44名 14%

Bタイプ 113名 37%

Cタイプ 54名 18%

Dタイプ 96名 31%

定年後のマトリックス

高↑生きがいで働く意欲↓低	A 44名	B 113名
	D 96名	C 54名

低←生活のために働く必要性→高

60歳の時点では「まだまだ頑張る派のBタイプ」が最も多くなっています。

Ⅲ. これからの課題を予測する

これからの課題を次の5つの視点で検証してみたいと思います。

1. 経済的問題
2. 雇用延長や再雇用問題
3. 精神的つながりの問題
4. 生きがいについての問題
5. 人口増減の問題（Uターン・Iターン）

1. 経済的問題

今回の調査では今後の生活支出費や受給年予定金額の質問を行っていませんので、60歳以降の生活で経済的にどの程度問題があるのかは解りませんが、総務省のデータや他の団塊世代向け調査データから見るとほんとうに生活に困る人はごく一部だと考えられます。大半は漠然とした不安や時間の使い方の問題から仕事を望んでいて、生活が困窮するほどの心配は無いと思われます。しかし、少数であっても一部の属性は生活そのものが困難になることがあり得るかもしれません。その属性は「子供に頼れない」単身又は夫婦世帯で、持ち家がなく、しかも年金がほとんど受給できない人達です。

今回の調査では男女合わせて6.8%が単身世帯、27.8%が夫婦のみの世帯です。この34.6%の方が賃貸住居で年金がなければ将来はかなり不安定と言わざるを得ません。

ほんとうに困っている属性と60歳でまだ元気だから働きたいレベルの就職の悩みは根本的な質が違うのです。

2. 雇用延長や再雇用問題

求められている人材は一握りの技術をもった専門職で、一般的なホワイトカラーの再就職は困難が予想されます。その意味でシルバー人材センターなどの部分的な仕事が重要な位置づけを持つ事になると考えます。企業はフルタイムで雇うケースはまれです。これからは専門的知識や技能を部分的に提供するシステムが必要になり、それがシルバー人材センターだと思います。しかし、団塊の世代はまだ若いので、シルバーという呼称に違和感があるでしょうし、また一般的にはシルバー人材センターのイメージは、困ったときの便利屋さんのようなローテクのイメージがあり、専門的知識を持った層にはやはり抵抗があるのではないのでしょうか。（*あくまでも一般のイメージで実態を知らない人のイメージです）

企業側も働く側もフルタイムでハードに仕事をこなすより、パートタイムで専門知識を生かす方が両者にとってはるかにメリットがあると考えます。

3. 精神的つながりの問題

会社人間で40年前後過ごしてきた人が、会社に行かずに毎日家にいるとどのような状況になるのでしょうか。家族との会話がない。地域とのつながりがない。特に趣味もない。このような人が毎日家にいたら、団塊の世代の引きこもり現象が起きることも考えられます。やはり地域社会とのつながりを持つ機会を増やしていろいろな接点を設ける必要があります。

4. 生きがいについての問題

市民活動などに対してどの程度やる気があるか。一般的には時間的余裕が出来た人達が、

社会とのつながりを求めて、市民活動を中心としたボランティア的な活動に参加すると言われていますが、どの程度の人達がやる気であるのか、またどの程度の関わりを持つのかは判断できません。コミュニティビジネスなどのソーシャル・アントレプレナーも甘い考えで起業しても成功することはないでしょう。ビジネスはそんなに簡単にはいかないものです。NPO的な活動を通じて社会貢献することも、会社勤めとはまた違ったたいへんさがあります。そこを十分に理解した上で、活動を続けていけるかが団塊世代側の課題です。市民活動を知る機会が必要になります。

5. 人口増減の問題（Uターン・Iターン）

入間に30年以上居住していると回答した人は約40%。それ以外の60%は30歳を過ぎてから入間に転入してきた人達です。30歳を過ぎてから入間に転入してきた人達は、定年後入間に残るのか、または自分の故郷へ帰るのでしょうか（Uターン）。もしくは田舎暮らしを求めてどこかへ転居するのでしょうか（Iターン）。

やはり今回は定年後の転居に関しては質問していないので、ハッキリしたことはわかりません。またこの事例とは反対に、都内から団塊の世代が移り住んでくることも考えられます。これからの入間市の老人比率がどのように推移していくのかによって、対応方法が変わってくることは言うまでもありません。

IV. 定年後の欲求レベル

マズローの5段階欲求説

最後にマズローの5段階欲求説に当てはめながら団塊世代の置かれている位置を分析してみたいと思います。



アブラハム・マズロー（1908-1970）は欲求を五段階に分け、人はそれぞれ下位の欲求が満たされると、その上の欲求の充足を目指すという欲求段階説を唱えました。下から順に、生理的欲求、安全の欲求、帰属の欲求、自我の欲求、自己実現の欲求という順になっています。

【生理的欲求】は、空気、水、食べ物、睡眠など、人が生きていく上で欠かせない基本的な欲求をさしています。これが満たされないと、病気になり、いらだち、不快感を覚えます。

【安全の欲求】は生命としての基本的な欲求の一つとなります。生を脅かされないことの欲求で、たとえば、暴力などにより絶え間なく生存を脅かされていると、その危険をいかに回避し安全を確保するかに必死になり、それ以外のことが考えにくくなるわけです。

【社会的欲求】は、帰属の欲求です。会社、家族、国家など、あるグループへ帰属したいという欲求は、あくまで生存を脅かされない状態になって出てくるわけです。

【自我の欲求】は、他人からの賞賛を求める欲求であり、それはグループへの帰属が前提となるからです。（なにかしらグループに所属しなければ、自分を認めてほしい他者を認識することはありません。）この欲求は二つに分かれます。ひとつは、仕事の遂行や達成。二つめは、そのことにより他人から注目され賞賛されることです。

【自己実現の欲求】は、あるべき自分になりたいという欲求です。たとえば、自分の描きたい絵画に打ち込む芸術家は、自己実現の欲求に突き動かされているといえます。研究欲求、平和の追求、芸術鑑賞なども含まれますが、注意しなければならないのは、あくまで「自己実現」を求めてのことである、という点です。たとえば、そこに「人から賞賛されたい」という気持ちがあるのであれば、それは自我の欲求です。ここには、ある種の無償性が含まれているのが特徴です。

*左側が定年前の例、右側が定年後の例です。

定年前(会社員時代)	欲求レベル	定年後
大きな業績・実績	5 自己実現欲求	社会貢献活動・趣味を極める
出世・評価	4 自我欲求	趣味や旅行
会社関係の付き合い	3 社会的欲求	市民グループ・地域とのつながり
安定した給与	2 安全欲求	安定した収入（年金・仕事）
正社員	1 生理的欲求	住まいや家族の安定

■定年前の「会社員時代」と、定年後の「一市民」としての対比

一般的に会社員はレベル3～4の段階にいると考えられます。ところが3～4のレベルにいた会社員が定年後に5に向かうケースは少数かもしれないのです。年金がもらえるま

で再就職や再雇用が思うようにいかないと、2の段階が満たされない人が多くなることも予想されます。そうすると退職金や蓄えを使いながらの生活になり将来が不安になります。そのような状況では、3より上を実現する欲求が起こりません。反面、再就職や年金の見込みのある人は、ある程度余裕が生まれ、3の地域とのつながりや、4の趣味に関心を示します。

今回の調査では47.2%が2のレベルに関心を示したとも言えます。それ以外の人が3～4のレベルに該当すると思われます。人によっては3と4の位置が入れ替わるケースがあるかもしれません。また社会的な欲求をあまり気にせず、4に関心を示す属性もいます。

当たり前のことですが、1と2の生活の基盤がしっかりして、3～5の実現に向かうのです。では、どのくらいの収入や蓄えがあれば、安心して暮らせるのでしょうか。総務省の2004年の「全国消費実態調査」によれば、団塊の世代に該当する50代後半の貯蓄残高は、平均1737万円となっています。住宅ローンや教育ローンなどの負債を相殺した純貯蓄でも平均1297万円あります。また2005年の総務省の「家計調査」によると、無職の高齢者夫婦世帯の生活必需支出は月額15.1万円です。これに対して公的年金の受給額は21.2万円と生活必需支出の1.4倍になっています。そしてこれに退職金が加算されます。

これらのデータから判断すると決して生活費に不自由する事はないように感じられます。現役時代の支出と比較すると21.2万円は少額で不安を感じているだけかもしれません。

これからは60歳以降のライフスタイルを見直すことが重要です。日本人の勤勉さが仕事をしていないとなんとなく不安になったり、後ろめたさを感じてしまう為に、なんとなく職を求めるケースが多いのかもしれませんが。ライフスタイルをきちんと考えて、計画的な支出をすれば大半は十分に生活できる状況にあるのではないのでしょうか。

これからはお金をかけないで生活を楽しむスタイルの構築が必要です。ほんとうの豊かさと消費形態を個々の収入や蓄えに合わせて、自分なりのライフスタイルを築いていくべきです。その上で、地域社会とのつながりや社会貢献を通じて自己実現を目指すセカンドライフを送ってもらいたいと思います。